

200日間取り組んだアスンシオン日本人学校のオンライン授業について

前アスンシオン日本人学校校長

愛知県安城市立安城北部小学校校長 加藤 雅亮

キーワード：在外教育施設、アスンシオン、オンライン授業、Zoom、

赴任校の概要（2020年5月1日現在）

学校名・日本語：アスンシオン日本人学校

学校名・現地表記：Colegio Japonés en Asunción

URL：<https://col.jap2blog.wordpress.com/>

児童生徒数：11名

1. はじめに

アスンシオン日本人学校に勤務した3年間の3年目は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響を大きく受けることになった。この年度は臨時休校が4月から年度末まで続いた。そのため年度初めの4月6日から、ずっとオンライン授業を続けて、カリキュラムを進めてきた。年間201日の授業日のうち、卒業式・修了式以外の200日をオンラインで行った。

本校は、世界90校以上ある日本人学校の中で、令和2年度に最も早くオンライン授業をスタートさせることができたのではないかと考えている。それは、「3月から計画的に準備を進めたこと」および「令和2年度のはじめに新入生や新たな派遣教員の赴任がなかったこと」による。派遣教員の入れ替えがなかったため、始業式は他校よりも早い4月6日に設定していた。パンデミック下で本校がどのようにオンライン授業を実施していったか、その取り組みについて記録に残したい。

2. 新型コロナウイルスの感染拡大に伴うパラグアイの対応と日本人学校の対応

(1) パラグアイ政府の対応

2020年3月10日にパラグアイ政府が「15日間の全学校臨時休校」および「多人数が集まるイベントの中止」を通知した。3月20日には学校休校の延長となり（最終的に、2020年度中は継続）、併せて、不要不急の外出禁止（スーパー・薬局・ガソリンスタンドでの購入は可能）を発表。工場は操業停止、多くの店は休店へ。違反者には罰則がある実質的な「ロックダウン」開始となった。3月23日には、アスンシオン空港が閉鎖され、日本や他国への避難路が完全に閉ざされる。当初、24時間外出制限中でも生活必需品の買い物には行けていたが、4月10日には、車のナンバープレートの末尾によって制限されることに。奇数が月水金日、偶数が火木土。奇数が1日得だが、曜日の入れ替えはない。その後、10月初旬までは、子どもたちが思うように外出したり店で買い物をしたりすることができない状況が続く。

日本の人口の5.5%ほどしかないパラグアイ。人口10万人あたりの感染者数や死亡者数は、日本に比べると多い。しかし、南米の中ではよく抑えてきた。また、国民の経済にも配慮して、制限を加えながらも仕事を回しながら感染対策を行ってきた。現地の学校については、早くからオンライン授業が推奨され、私が帰国するころには、対面授業とオンライン授業を保護者が選択するようになっていた。対面授業の場合は、様々な細かな制限も決められていた。

街では、各店の入り口には、必ず簡易式の水と洗剤の出る手洗い場が設置されており、それに加えて消毒液を手で吹きかけて体温チェックをしている店も多い。PCR検査も、街のいろいろな場所で行っていた。テレビのア

ナウンサーは、マスクをしながら話していた。意識をしていない国民ももちろん少なくないが、小国の頑張る姿に頼もしさも感じた。

(2) アスンシオン日本人学校の対応

2020年2月に中国で感染症の影響が出始めた頃、中国の日本人学校の様子を注視し、情報を収集していた。まだ遠いところの話で、すぐには地球の反対側までこの影響が及ぶとは思っていなかったが、予想よりもはるかに早くパラグアイ政府は動いた。日本が臨時休校を決めた10日ほど後に、感染者わずか国内2名の段階でパラグアイは学校の臨時休校を決めたのだ。

本校が休校になってすぐ、これが長期化した場合の子どもたちの学びの保障を心配していた。パラグアイのネット環境でオンライン授業ができるのかは不安だった。オンライン授業の準備を進めるに当たって、意識したのは次の3点である。

- ① ビデオ授業などの一方向の授業ではなく、双方向の授業を行う。
- ② 子どもたちの生活のリズムをできるだけ学校に通っている時のリズムに近づける。
- ③ メンタルヘルスのケアにも配慮し、子どもの表出場面を増やした授業を行う。

以下に、オンライン授業をスタートさせるにあたっての3月～5月の経過を記す。

○ 2020年3月11日(水) <職員連絡>

この日から臨時休校がスタート。集まった職員に指示を出す中で、情報担当者には「今後、休校の長期化に備えて、本校で行えるオンライン授業の可能性について探ること」と伝える。その際に、「Zoom (Zoom Video Communications) は本校で使えるか検討を」と指示。パラグアイ政府の指示により、翌日から職員は原則在宅勤務。

○ 3月24日(火) <職員・家庭連絡>

情報担当者から「Zoomでいけそう」との回答を得る。「授業のオンライン化を念頭に置いたZoomの使い方」(作成: 東京大学)を職員にメールで配付。各家庭に「パソコン・タブレット等ネット環境調査」をメールで実施(28日締切)。⇒ プリンターのない家庭が多い、兄弟で1台しか使えるパソコンがない家庭があることを把握。

○ 3月28日(土)・29日(日) <職員自主研修>

日本の某グループ主催のZoomを使った授業紹介の講座が開かれる情報を得て、職員に紹介。職員は自主的にその講座にパラグアイからZoomで参加。⇒ Zoomで授業を進めるイメージやZoomでやれることは何かを体感することができた。

○ 3月31日(火) <職員研修>

外出制限の中であったが、授業をスタートさせるためにどうしても必要であると判断し、非常勤職員も含めて全職員が学校に集合しZoomの研修を実施。⇒ この日までに各自で自主研修してきたことの疑問点などを出し合って解決。

○ 4月1日(水) <各家庭との接続テスト>

情報担当者のZoomミーティングルームに子どもたちが入れるかを確認。その後、各教員のミーティングルームに、メールで知らせたIDを入力しながら子どもたちが順番に入室(スタンプラリーのような感じで)。⇒ 今後授業で入室する際、毎回IDの数字を入力しなくても履歴の選択で入れるようになる。この日から毎日、朝8:00と夕方16:50に職員打ち合わせをZoomで行う。

○ 4月3日(金) <中学3年生でオンラインの試行授業>

中3の社会科(校長)と数学科(中3担任)で試行授業を実施。⇒ パワーポイントに貼った画像や音楽、映像も生徒がきちんと見られること等を確認。

○ 4月6日(月) <新年度スタート、担任発表と担任とのあいさつ>

年間計画では始業式を予定していた日。Zoomで校長があいさつをし、その後担任を発表。児童生徒は指定時刻に担任のミーティングルームに入り、保護者とともにあいさつ。その後、担任が家庭訪問をして教科書配付の予定だったが、外出制限が厳しくなってきたため、校長と教務主任が二手に分かれて教科書を家庭に届ける。学校だよりに、各学年各教科の担当者名を記載。

○ 4月7日(火) <授業スタート>

1日8時間目までの枠をつくり、「1・3・5・7時間目」に授業を行う学年と「2・4・6・8時間目」に授業を行う学年に分けるのを基本とする。授業は小学部45分、中学部50分。Zoomは無料で使用する。⇒ 40分で切れてしまうため、授業の途中で一度入り直すことで規定の授業時間を実施。1時間おきの授業にしたのは、兄弟で同時に授業が受けられない家庭がある関係と、画面を見つめる目の負担を軽減するため。時間割は毎週異なるものをメール添付で配付。

オンライン授業の時間割 5月5日(火)

	小2	小4	小6	中1	中2	中3
1 8:30~		算数	理科			数学
2 9:30~	国語			数学	国語	
3 10:30~		社会	算数			英語
4 11:30~	生活			理科	数学	
5 13:00~		国語	社会			国語
6 14:00~	算数			英語	理科	
7 15:00~	全校体育					
8 16:00~						社会

ある日の時間割 (教師別に色分けされている)

○ 4月13日(月) <オンライン授業2週目>

中学3年生を毎日4コマから週3日5コマに増やす。

○ 4月14日(火) <「卒業式」「入学式・始業式」をオンラインで実施>

延期になっていた卒業式をZoomで実施。これに先立ち、4月11日(土)に小6担任と校長が卒業生家庭を正装して訪問し、マンションの前の屋外にて卒業証書を渡した。Zoomによる式では、校長が証書を授与するフリをするタイミングに合わせ、保護者がパソコン越しに本物の証書を卒業生に“授与”した。⇒ 見ている子どもたちは後で「本当に証書を渡しているように見えた」とのこと。運営委員長も参加して祝辞をくださったり、子どもたちの呼びかけや、卒業生一人ひとりの感謝の言葉もあつたりしたため、「意外と良い卒業式だった」と保護者も感想を後で話してくれた。合唱については、伴奏を流しても家庭によって音がずれることが音楽の授業の中で分かっていたため、「伴奏はなくし、一人ひとりがリレー形式のソロで歌う」形で実施。⇒ なかなかスムーズに行うことができた。一人ひとりの思いも感じられ、良い形であった。

○ 4月20日(月) <オンライン授業3週目>

週2回の全校体育のラスト10分にフリートークの時間を設け、子どもたちのメンタルヘルスに配慮。この週より、教科によっては、Google Classroomも使っていく。以後、3週目・4週目で学年によって授業時間を増やす。

○ 5月28日(木)・29日(金) <オンラインでの中間テスト実施予定>

- ① テスト用紙は当日の朝に家庭に配付。
- ② Zoomを使い、監督者の指示でのり付けされた封筒をはさみで開け、問題用紙を取り出し、テストを実施。
- ③ 終了後は、配付してあつた封筒に解答用紙をすぐに入れて両面テープで留める。
それを監督者は画面越しに確認。
- ④ その日のテスト終了後に職員が家庭へ回収に回る。

以後、同様に定期テストを実施した。

(3) 6月以降の取り組み

1期は、外出制限が厳しかったため、子どもたちは祝日があつてもどこにもいけない状態であった。そのため、3回の祝日を授業日とし、7・8月の冬休み期間も子どもたちはあまり外出できないため、1週間短縮した。2学期からは技術・家庭科、道徳、総合的な学習の時間も授業に加えていった。特に道徳では、帰国によって児童

生徒数が減ったこともあり、2学期は全校道徳として実施し、派遣教員が順番に授業者を務めた。子どもたちは、学年を超えて、それぞれの思いを出し合いながら授業を深めていく姿が随所に見られた。また、授業研究会が行いにくい状況でもあり、こうした全校道徳の機会が、教師の互いの授業を見合い、学び合う機会にもなった。

また、児童生徒会活動を行う機会はなかなか持てなかったのだが、日本へ帰っていく子どもたちへの「お別れ会」が、児童生徒会活動として行われた。今まで送っていた色紙の寄せ書きはできないが、Zoomの画面上にメッセージを示した姿を教師がスクリーンショットで撮り、それを集めて記念の色紙を完成させた。そして、お別れ会では、オンラインでも実施できるレクリエーションを計画し、児童生徒や教員が笑顔で一体感を味わいながら楽しいひと時を過ごすことができた。

(4) 授業のようす

授業は、私自身は中学部の社会科と美術科、小学部の図工科を担当していた。社会科では毎時間、パワーポイントで20枚ぐらいのスライドを作り、それをもとに授業を実施した。1時間の授業に要する準備や教材研究は2時間ほどかかった。美術科や図工科では、教材を事前に家庭へ配付をし、子どもたちが作品作りをする際には手元を映させてアドバイスをを行った。また、子どもたちの作品を画面上で撮影し、それをスライドにまとめて鑑賞などを行った。

理科の教員は、学校の理科室から実験を提示しながら授業を進めた。パソコンのほかにも、スマホで実験器具をアップで映して子どもたちに提示することができた。算数・数学科の授業では、教室の黒板を使って授業を行うケースが多く見られた。教員が学校から一斉に授業を実施すると、ネットが不安定になるため、多くの教員は自宅から授業を行った。パラグアイのネット環境の脆弱性によるのか、大雨が降るとフリーズしやすかったが、常に子どもたちのそばにいる感覚は、教員にも子どもたちにも大きな喜びであった。こうして200日間のオンライン授業をやり遂げた。以下に、オンライン授業を行っての感想を記す。

○子どもたちの声

- ・ いつも学校でも少人数の授業だったので、学校とあまり変わらない感じがする。でも、先生たちは準備がたいへんそう。
- ・ けっこういい！ パワーポイントの資料は見やすい。
- ・ みんなに授業で会えるので、あまり会っていない気がしない。

○教師の声

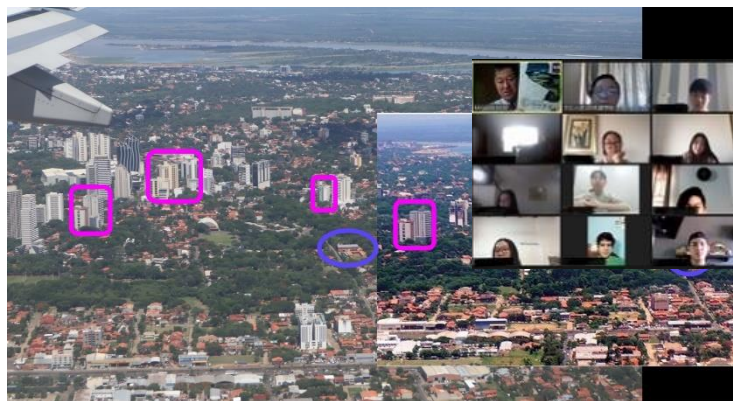
- ・ この人数の規模なので、日本の学校よりは困難さが少ない。子どもたちの学びが確実に進んでいることがうれしい。
- ・ 接続の不具合などが起きることは当たり前なので、あまり細かいことを気にしないようにして、つながっていることに喜びを感じながら授業をしている。
- ・ おうちの人が家の中で静かに過ごすように協力してくれていることを感じる。
- ・ 準備に時間がかかるし、学校の授業よりもからだの疲労と目の疲労を感じる。

○保護者の声

- ・ 休校になっても、すぐにオンライン授業を始めてくださり、とてもありがたかった。
- ・ 毎日、先生や友達と密に繋がりがながら、本当に楽しそうに授業に参加している様子が、ドア越しに伝わってくる。外出制限の存在も忘れるほど、充実した日々を送らせていただいている。
- ・ 体育では、家庭でできる最大限の運動を楽しくしていただいて、感謝している。体育の授業後、汗だくになって笑っている子どもの姿を見ると、嬉しくなる。

- ・子どもが「先生たち、いつも工夫してスライド作ってきている」とよく言っている。いつも楽しい授業に感謝している。

このパラグアイのネット環境で、どこまでのことがやれるか不安だったが、予想以上に着実に授業を進めることができた。授業を基本的に1時間おきに設定したのは、子どもたちにとっても教師にとっても余裕をもつことができ、たいへんよかったと思っている。この1年間、子どもたちは家の都合以外は、ほぼ授業を欠席しなかった（通信事情が悪くて自習になったことはあるが）。私が心配だったのは、伸び伸びと過ごせない日々の中で、子どもたちが心のバランスを崩して「もう授業に出るのは嫌だ」と言い始めないか、ということ。そして、教員もこうした生活に参ってしまい、体調を崩す人が出ないか、ということがあった。しかし、子どもたちの前向きな姿勢は本当に素晴らしく、それに私たち教員も元気をもらい頑張ってくられた。また、非常勤も含めた本校教員の、子どもたちのために精一杯のことをしようとする姿勢も素晴らしかった。深く感謝している。



現地日系人の通う日本語学校の生徒に向けて、校長が出前授業をオンラインで実施。6年前の新市街地と今の新市街地の航空写真を見比べて、街の発展を考える授業。Zoom内でグループ分けをしての話し合いも実施した。

3. おわりに

2020年度はたくさんの行事や学校での活動が中止となり、できなかったことを挙げていけばきりがないうほどの1年であった。しかし、そうした中で、できることに目を向け、こうした1年だからこそ得られること、感じられることを意識するように、子どもたちには伝え続けてきた。子どもたちにとっても私たち教員にとっても、生涯忘れられない1年になった。異国の地であったからこそ、こうしたパンデミックの中で気づかされたことが多々ある。今後、出会う子どもたちに、その経験を生かしていきたい。

この3年間、貴重な機会を与えていただいた文科省、県教委、市教委をはじめ、私と関わってくださった多くの皆様に深く感謝を申し上げて、私の実践記録の報告を終えたい。